

神の前に豊かになる

ルカ 12 章 13～21 節

「むしろ、あなたがたは御国を求めなさい。そうすれば、これらのものはそれに加えて与えられます。」 ルカ12章31節

サンクスギビング・デー（感謝祭）は、1620年にメイフラワー号でアメリカに渡った清教徒たちが、その地での初めての収穫を神様に感謝したことから始まったとされています。アメリカでは11月の第4木曜日、カナダでは10月の第2月曜日で、共に休日になっています。

ピューリタンの人々は、船でたどり着いた新大陸の荒地を切り開きました。そして、その地を耕し苦勞して、やがて作物を実らせる

ことに成功したのです。その様な大変な戦いがあった歴史を思う時、今の自分自身の生き方についていろいろと考えさせられます。

今、私たちは、食べる物にも着る物にも困っていません。満たされた生活を送っています。しかし、そういう物質的豊かさに、どっぷりと浸かっていると、この私の命も自然の恵みも、すべてが神様から与えられたものである、ということをつい忘れてしまいます。

また人間は、残念ながら無意識のうちに、神様の事を忘れて、自分の力で生きているような思いに満たされてしまうことがよくあります。そういう中で、神様の前での「謙虚さ」が、いつの間にか失われてしまっている気がするのです。物質的に満たされた豊かな生活の中にあったとしても、私たち人間は、この大地から、多くの恵み

を頂いているということにもっと敏感でなければなりません。心から謙虚に生きていく者でありたいですね。

－収穫に感謝の思いが少ない私たち－

私自身について言いますと、今回、サンクスギビングのことに思いを巡らせていた時、私の心の中には「収穫に感謝する」という思いが日頃、いかに少ないかということに気付かされました。例えば、あらゆる食べ物は近くのスーパーで買ってきます。この様にスーパーで買ってきたお米を食べて、無くなればまたお金を出して買い足すのです。このような消費生活を繰り返している私たちには「収穫の恵み」ということへの認識が「とても低いな」ということをつくづく思わされていきました。農耕生活から遠ざかっている現代社会のシステムの中では「神から与えられている、自然からただ

いている」という自覚をもつにはあまりにも「障害」が多いということに気づかされました。

最近していませんが、あの「おいもほり」は勉強になりました。楽しかったですね。

----- 「与えられている、生かされている」の自覚を持って
生きたい -----

それでは、現代に生きる私たちが「与えられている」、「生かされている」という思いを持って、感謝して、謙虚に生きるにはどうしたらよいのでしょうか？

ルカ 12 章 13～21 節 このところでイエス様は次の2つのことを言っています。

1, 15節、「どんな貪欲にも気をつけ、警戒しなさい。・・・」つまり、「あれも欲しい、これも欲しいという欲、物への執着心が深くなならないように注意しなさい」と言っているのです。この「貪欲」の語源には「もっと多くを持つ」という意味があるそうですが、より多くの物（富）を持とうとすることが命を保証することにはならないと言っているようです。お金を土に蒔いても、お米一粒も取れません。世界中のお金を集めても天国には入れません。貪欲では天国に入れないのです。貪欲な生活をしていると天国はどんどん遠くなっていきます。

2, 次に、21節、「自分のために富を積む」ことの愚かさを教えています。この金持ちは、決してそれまで怠惰な生活をしていただけではありません。一生懸命、汗を流して働いてきたからこそ、その年の収穫の時期には、多くの実りがもたらされたのだと思うので

す。彼のそれまでの行いで、恐らく咎められるような点はなかったのではないのでしょうか。しかし、この金持ちには、決定的に欠けているものがありました。

17、18節、に記されている「私の作物」「私の倉」「私の穀物や財産」のことばですが「私の」という言葉が繰り返し書かれているのです。18節は「私の作物」「私の倉」「私の穀物」「私の財産」と続きます。

このように読んでみると、その有り余る穀物や財産を独り占めにして、一人ではくそ笑んでいる金持ちの、更にその様な生き方をしている多くの人間の姿が浮かんできます。残念ですがこのお金持ちは、全てが神様から与えられたものであるという謙虚な心を忘れていました。何もかも神様抜きで、自分一人の力で成功したのだ、私がやったのだ。そんな自己中心的な思いが心の中に満ち

ていたのではないのでしょうか。ですから今イエス様は、「そのことが問題だ」と指摘なさっているのです。

－神様への愛を積みなさい－

イエス様はこのたとえ話を通して「自分のために、自分のために、自分のために、宝を貯えようとする、もっと欲しい、もっと、もっと、もっと多く持ちたいという貪欲さが生まれますよ」警告しておられます。そしてそれは、海の水を飲むようなものです。飲めば飲むほど乾くのです。そしてその目に見える富はいつか消えていきます。更にそれだけではなく、神様抜きで幸せになろうとしている、そんな自分をも滅ぼしてしまいます。だからこそ、イエス様は言われます。ルカ 9 章 25 節「人は、たとえ全世界を手に入れても、自分自身を失い、損じたら、何の益があるのでしょうか。」「目

には見えないけれど尽きることのない、本当の富を積みなさい」と。つまり、それは「神様への愛を積みなさい」と言っておられるのです。

－恵みを分かち合う生き方－

最後の21節には「神の前に富まない者（新共同約では、豊かにならない者）」と書かれています。では、「神の前に豊かになる」とはどういうことでしょうか。それはわかりやすく言えば、心の中が、どれだけ自分のことよりも神様のことで満たされているか、ということでもあるのです。それは、この世での、目に見える豊かさとは全く異なるものです。そのような神様で満たされている心があれば、有り余るほどの穀物や財産を得たとき、自分のためだけに費やそうとは考えないはずです。きっとその恵みを隣り人と共に分かち合おうとするはずです。イエス様はこのたとえ話を通して、私た

ちにそのような生き方をしてほしいと願っておられるのです。上からいただいたものを、まわりの人々ととおすそ分けするのです。

私たちの肉的な命は、神様からいただきました。私たちの永遠のいのちはイエス様の十字架、復活からいただきました。この恵みのいのちを人々と分かち合っていきたいですね。これが伝道ではないかないと思います。

—すべては、神様からと知る—

ところが、この豊かな時代に生きている私たちは、あらゆるものに対して「私のもの」という所有欲を強く持っていて、全てを与えて下さっているのは神様だということを忘れていきます。残念ですね。更に、農業を中心とした生活から遠ざかってしまった私たちには、「作物の収穫への感謝」を、日常的に持つことが出来なくなっています。

しかし、全ての恵みは神様から与えられていて、自分はそれを受け、そして生かされている、受け身の存在なのだ、ということを実感して日々生活できたら素晴らしいと思います。

そういう意味で、いちご摘み、おいも掘りを経験、体験することはとても大切なことです。

—本当に豊かな者になろう—

収穫感謝の時は、単に私たちの食べ物が与えられたことへの感謝の時ではなく、全ては神様が与えてくださっていることを思い起こし、神に感謝をささげる時でありたいと思います。

今は一年中で一番美しい季節です。外に出て行って美しいあふれる恵みに触れて、与えられている、生かされていることへの感謝の

気持ちを深めてください。神様への感謝の思いで心を満たしたいですね。神の前にこころ豊かなる者となりましょう。

聖書のことば。「むしろ、あなたがたは御国を求めなさい。そうすれば、これらのものは、それに加えて与えられます。」 ルカ 12章31節